高次リテラシーの発達に関する動機づけや感情の影響

企　画　者：沖林洋平（山口大学）
司　会　者：藤木大介(愛知教育大学)#
話題提供者：沖林洋平（山口大学）
山口剛(法政大学大学院・日本学術振興会)
池田まさみ(十文字学園女子大学)#
指定討論者：篠ヶ谷圭太(日本大学)
豊田弘司(奈良教育大学)

企画主旨

高次リテラシーは，近年の日本の学校教育を考える上で欠かせないトピックになりつつある。例えば，新学習指導要領においては，どの教科でも，「活用力・表現力」の重要性が指摘されるようになり，教科書にこれらの項目が反映されるようになっている。一方，大学等の高等教育においては，中教審の答申等にも示されるような「学士力」や，厚生労働省の提唱する「社会人基礎力」など，生涯にわたる言語活用力等の重要性が指摘されるようになっている。このように，高次リテラシーに代表されるような，人間の生涯にわたる言語活用力や思考力の育成は，近年の重要な教育的課題であるといえるだろう。

しかしながら，同様に，近年，リテラシーのような高次認知機能に対して動機づけや感情の及ぼす影響も指摘されるようになっている(鈴木・白石・鈴木 2009)。このような研究は，思考や記憶などの高次認知が動機づけや感情などの要因と独立にモデル化することよりも相互影響関係の検討可能性を示唆するものであるといえる。また，動機づけや感情などの教育への効果を検討する場合，発達の影響を見逃すことはできない。この点において，本稿において山口も指摘するように，近年，学習の改善を促進する活動として自己調整学習がわが国でも提唱されるようになっている。この点において，Azevedo, Johnson, Chauncey, Graesser(2011)は，ハイパーメディアを用いた学習環境における自己調整学習の過程において，情報の統合や要約とともに，知識に対する感情(Feeling of Knowledge ; FOK)や学習到達度に対する主観的判断(Judgment of Learning)の重要性を指摘している。FOK や JOL は学習に対する主観的感情であり，学習動機づけの規定因となりうるものではないかと考えられる。

そこで，本シンポジウムでは，中学生から高校生，大学生に至る発達を踏まえた高次リテラシーと動機づけや感情の要因の関係，そして高次リテラシーの育成に関わる教育可能性について検討したい。シンポジウムにおいては，指定討論者からの提言に答えるだけでなく，広くフロアとのディスカッションも期待する。

大学生のアイデンティティスタイル，批判的思考と幸福感の関係

沖林　洋平

近年，大学をはじめとする高等教育の場面でも批判的思考，あるいはクリティカルシンキングの重要性を鑑み，共通教育や専門教育における教育目標として設定する大学や授業科目がみられるようになった(楠見・田中・平山，2012；中山・長濱・中島・中西・岸，2010)。このような背景には，高等教育における高次リテラシーとしての批判的思考の重要性が認識されるようになってきていることもその理由としてあげられると考えられる。しかしながら，大学教育によって批判的思考を身に付けた者がどのようなキャリア観をもっているか等についての研究は，キャリア教育の領域では行われている(前田・新見，2010)，個人や集団の心的側面に焦点を当てた研究は十分ではない。

本発表では，高次リテラシーの中核の一つとしての批判的思考態度(平山・楠見，2004)と，大学生のアイデンティティスタイル，そして幸福感の関係について検討することにより，動機づけや感情に裏付けられた大学生の人生観としての幸福感と批判的思考との関連について検討したい。

本研究で用いた測定尺度としての幸福感は人生の満足度尺度(大石，2007)である。これは，Diener, Horwitz, & Emmons(1985)によって開発された Satisfaction with Life Scale(SWLS)の日本語版尺度である。この尺度の特徴は，すでに多くの先行研究(e.g. Pavot and Diener,

1993; Oishi, Diener & Schimmack, 2008)によって，諸国との直接比較が行われているという点である。本発表においては，大学生および一般社会人を対象とした調査研究の結果をもとに，アイデンティティスタイル，批判的思考，そして幸福感の関連について検討したいと考えている。

主要引用文献

大石繁宏 (2009) 幸せを科学する 新曜社

高校生における動機づけの向上と学習方略の使用促進の検討

山口 剛

一昨年からみられる学習指導要領の改訂など，近年は日本教育界の学習面における大きな転機を向かえているといえるだろう。学習の改善について，教育心理学では自己調整学習（Self-Regulated Learning）が注目を集めている。自己調整学習とは，学習者を学習に対する能動的な主体として捉え，自身の学習活動を把握・調整するという枠組みである。自己調整学習は本シンポジウムのテーマでもある，高次リテラシーにも深く関わりがあると考えられる。読み書きやコミュニケーションにおいて，自己の活動を適切に調整するのは重要であるといえるだろう。

本発表では，自己調整学習を構成する概念であり，高次リテラシーとも関係すると考えられる学習方略について取り上げ，動機づけがもつ影響を検討する。動機づけがもつ学習方略使用への影響は，多くの研究によって示されている（e.g., 堀野・市川, 1997; 三木・山内, 2005)。その際に，高校生の学習について注目し，日本の中学および高校において重要な，定期試験の得点と試験までの時期といった変数の影響にも注目する（山口, 2012a, b)。また，学習におけるメタ認知も考慮し，動機づけやメタ認知によって，いくつかの学習方略の使用傾向が異なるかも検討する。最後に，大学における初年次教育に注目し（藤田, 2006)，高校から大学へ，高校から社会へ出るにあたって，必要な学習能力や，それに向けた介入の紹介および提案を行いたい。

主要引用文献

藤田哲也（編著）(2006). 大学基礎講座［改増版］――充実した大学生活をおくるために―― 北大路書房

山口 剛 (2012a). 学習方略の使用を規定する測時期による要因違い検討――試験時と平常時に注目して――日本教育工学会論文誌, 36(Suppl.), 53-56.

山口 剛 (2012b). 高校生の英単語学習方略使用と認知的・動機づけ要因の関係――有効性の認知の効果に注目したテストの予想得点における個人差の検討―― 教育心理学研究, 60, 380-391.

中学生における批判的思考態度の獲得プロセスと育成 ―4波パネルの因果分析から―

池田 まさみ

高次リテラシーの中核をなす批判的思考には，情緒的側面（態度・傾向性）と認知的側面（能力・スキル）があり（Ennis, 1987, 1991)，両者をあわせ持つことによって，その力が上手く発揮される。

教育的観点では，批判的思考における態度がスキルに影響する（Ennis, 1991；楠見, 2010）一方で，メディアリテラシーやコミュニケーションスキルなどが態度の育成に関わる（楠見, 2010；Halpern, 1998, 1999）との見方もある。また、態度およびスキルともに学習意欲に関連するという報告もあるが，これらの影響する方向性については明らかにされておらず、変数間にどのような因果関係が存在するのか確認する必要がある。

そこで，これらの変数ついて，発達的観点から，中学生を対象に，批判的思考トレーニングの授業と並行したパネル調査を行い，「批判的思考態度」「情報活用の実践力」「学習意欲」「コミュニケーション行動」の4変数について，因子レベルと変数レベルでの因果関係を検討した。その結果，批判的思考態度の獲得に関して2つのプロセスが見出された。ひとつは，「学習意欲」が高い中学生ほど「情報活用の実践力」が高くなり，その結果，批判的思考の態度側面が向上するというものであり，もうひとつは，「探究心」の高い中学生ほど「情報活用の実践力」が高くなり，その結果，「学習意欲」が高まることで，「探究心」以外の批判的思考態度が向上するというものである。そして、最終的には，このようなプロセスを経て高められた批判的思考態度によって，「コミュニケーション行動」が増加することが確認された。さらに，学力との関係から獲得プロセスを検討した結果，学力高群と低群とでは，同様のプロセスであっても，批判的思考の育成においては重視すべき変数が異なる可能性が示唆された。

本発表では，上記のプロセスモデルを踏まえ，発達段階に応じた育成を検討すると同時に、批判的思考態度と動機づけや感情との関係について検討を試みる。